

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 早津恵美子 印

学位申請者 李京保

論文名 「日本語の補助動詞研究－「～テアル」形式を中心に－」

審査の要旨

本論文は、日本語の動詞の V-テアル形式（「あけてある」）をめぐって、語のレベル・V-テアルを述語とする文のレベル・その文を含む連文のレベルの性質をそれぞれ詳細に検討し、レベル相互の関係や、V-テアル形式（「あけておく」）・V-テイル形式（「あいている」）との異同も含めて総合的に論じた意欲的な研究である。約 2700 例の用例にもとづく実証的な研究により、アスペクト形式としての V-テアルの性質について従来の研究成果に多くの新たな知見を加えたことがまず高く評価される。そして、V-テアル文の類型として、存在様態文・結果状態文・経験所有文の三類がみとめられることを見出し、さらに、それぞれの類型の文が連文構造の中で独自のテキスト的機能を果たしていることを明らかにしたことは、これまでの研究にはなかった大きな功績である。理論的にやや物足りない面もなくはないが、V-テアルについて複眼的・包括的に論じた本論文は、日本語のアスペクト研究のなかできわめて重要な意義をもつ。最終試験（口頭試問）における応答においても、李氏がこの問題について深い理解をもっていることと、本研究をもとに今後ますます大きく進展させうる実力を備えていることが窺えた。以上を総合して、審査委員会は、この研究が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであると判断した。

なお、審査委員会は、早津恵美子を主査に、副査として、日本語学とくに本論文のテーマを含むアスペクト研究者である山崎恵氏（姫路独協大学教授）、および、本学の浦田和幸氏、高垣敏博氏、中澤英彦氏の 5 名で構成された。

論文の内容

本論文は、序章と終章および、第一章から第五章で構成されている。序章において本研究の目的、先行研究の流れの概略、本論文の論点などが述べられた後、本論として第一～五章があり、最後に終章において、本研究で残された課題を含め今後の研究の展望について述べられている。以下、第一章から第五章について各章の論点を述べ、従来の研究にみられない本論文の独創性にも触れることにする。

第一章「動詞」では、現代日本語の言語資料において用いられている V-テアルがどのような種類の動詞であるのかについて、小説・随筆・評論などの書き言葉を資料として、実証的に調査・分析される。

V-テアル形式で使われている約 2700 例の動詞について、それらの語彙・文法的な性質、すなわち、どのような構文をとるか、他動詞か自動詞か、他動詞ならばどのような語彙的意味の動詞か、といった性質が調べられ、分布の実相が探られる。そして、動詞を「物の変

化他動詞(運ぶ)」「人の変化他動詞(雇う)」「事の変化他動詞(高める)」「相手変化他動詞(頼む)」「主体変化他動詞(考える)」「自動詞(並ぶ)」の類に分けたとき、V-テアル形式をとる動詞の約 86% (延べ語数。異なり語数では約 71%) が「物の変化他動詞」であることが明らかにされる(「物の変化他動詞」には、《設置・付着(置く、入れる)》、《書記(書く)》、《つくりだし(作る)》、《様変え(切る)》などの下位類がある)。自動詞の V-テアルは 6 例のみであり、他動詞であっても対象の変化を捉えにくい動きを表す動詞(《接触(ふむ)》、《所有(もつ)》、《感情(恐れる)》など)の使用例はゼロであるという結果が示される。さらに、「物の変化他動詞」以外の、用例の少ない他動詞の V-テアルも、実際の使用例における構文的特徴は、上の《設置・付着》、《書記》、《つくりだし》、《様変え》類の動詞のそれに準ずるものであるという整理がなされる。

従来の研究において、V-テアル形式をとる動詞が意志動作を表す他動詞にほぼ限られることは明らかにされているが、使用の実際において語彙・文法的な性質からみた動詞類に上のような限定的な特徴があることは本論文がはじめて明らかにしえた事実であり、実証に徹する方法論をとったことの賜物といえる。そしてこの新たな知見は、次章の文レベルによる考察を進める大きな支えとなる。

第二章「文」では、第一章でみた動詞類の性質を土台にして、V-テアルを述語とする文が、文の意味構造・文法構造の点から、《存在様態文》《結果状態文》《経験所有文》の三類型に分けられることが明らかにされ、動詞「ある」の文法化の現象も確認される。

《存在様態文》とは、[[場所]に[物]が V-テアル] という構造をとり、“ある場所にある物がその動作を受けた後の状態で存在している”ことを表す文(「廊下に消火器が置いてある。」)であり、《結果状態文》は、[[物]が V-テアル] という構造をとり、“物がその動作による変化を受けた後の状態である”ことを表す文(「布が赤く染めてある。」)であり、《経験所有文》は、[[人]は{……を/と} V-テアル] という構造で、“人(話し手)の内面上に実現ずみの行為が経験として内在(意識)している”ことを表す文(「私は既にそのことを調べてある。」「両親にあず帰ると言ってある。」)である。この三類型の文の資料中での割合は、それぞれ、74.8%、8.5%、15.1%であり、《存在様態文》が三分の二を占めることが調べられている。

動詞との関係については、《存在様態文》と《結果状態文》はほとんどが客体変化他動詞(第一章でいう、物の変化他動詞、人の変化他動詞、事の変化他動詞の総称)の V-テアルを述語とする文であることが共通の特徴であり、前者は主として二格名詞と結合する客体変化他動詞(《設置・付着》《書記》《つくりだし》)、後者は主として二格名詞と結合しない客体変化他動詞(《様変え》)の V-テアルを述語とする文である。一方、《経験所有文》の述語が客体変化他動詞の V-テアルであることは極めて少なく、大部分が相手変化他動詞、主体変化他動詞からの V-テアルを述語とする。さらに、三つの類型の文は、動作の引き起こし手の文中での明示/非明示や捉え方にも特徴がある。まず、《存在様態文》は、動作主を文中に明示することができず、話し手による動作主存在への意識も希薄あるいは皆無であるのに対し、《結果状態文》では、動作主が非明示である点は同じだが話し手において動作主の存在は意識されている。そして《経験所有文》では、動作主は V-テアル文の主語(多くは話し手)に一致する。話し手による動作主の位置づけと文類型との間にこうした相関があることが文脈の精密な読みにより丁寧に論じられている。

こういった現象と関わって、この章では、いわゆる「文法化」の問題も論じられる。存

在動詞「ある」が文法化する現象は、三類型のうち《経験所有文》の V-テアルにおいても顕著にみられ、《存在様態文》においては文法化が進んでいないということが、副詞の種類と修飾関係の実態を綿密に調べることによって明解に示される。

これまでの研究では、V-テアル文の類型は、大きく二類に（論考によってはそれぞれをさらに二類に）分けられていたが、本論文では上のような三類型が提案され、広義の構文的特徴の種々および文法化との関係から、この三類型の妥当性が説得的に論じられている。これも、本論文が実証を旨とし、実際の用例をさまざまな観点から綿密に分析することによって成し得たことであり、現実の言語使用を正しく反映する三類型となっている。

第三章「連文」では、V-テアル文がテキストの中でどのような文と先行・後続の関係をなし、その連文構造の中で V-テアル文がいかなる機能を果たしているかが追究される。そして、V-テアル文を含む連文構造のタイプとして、＜空間認識描写型＞＜説明・解説付加型＞＜推量判断叙述型＞がとりだされる。これは、関係する先行文や後続文の有無、それらの文の意味タイプ（とくにモーダルな特徴）、および、第二章でとりだした V-テアル文の類型などの相互関係から生み出されてくる連文構造のタイプ分けである。

＜空間認識描写型＞は、【行為文・存在文・判断文・関連先行文なし — V-テアル文（存在様態文） — 動作文・判断文・存在文】という接続関係を典型とするものである（「彼は台所に入って包丁を探した。出窓の木枠に出刃包丁が立てかけてあった。彼はそれをとって右手に握った。」）。「波打ち際近くに昆布工場があった。周囲の砂浜には干し棚に昆布が干してあった。その昆布は〜。）。この構造中での V-テアル文は、接続関係にある文の述べる出来事に対してある空間を認識し描写するという機能をはたしており、先行文が行為文の場合はその動作が生じてくる状況を示し（上のはじめの文）、存在文や判断文の場合は全体的な空間を提示している（上のあとの文）。

＜説明・解説付加型＞は、【出来事文 — V-テアルノダ文（経験所有文）】という接続関係を典型とするものである（「彼が改札口を出るとみんながわっと取り囲んだ。8時の汽車で着くと知らせてあったのだ。」）。V-テアル文（ノダ形であるのが典型）は、先行文の表す出来事に対して事情の説明や解説を付け加えるという機能をはたしている。

＜推量判断叙述型＞は、【出来事文 — V-テアルラシイヨダ文（存在様態文・経験所有文）】という接続関係を典型とするものである（「この箱はいくら押しても動かない。よほど重い物がつめてあるのだろう。」）。先行文と V-テアル文（ラシイ・ヨウダなどのついた形が典型）とが、〔根拠〕と〔推量判断〕という関係をなしており、V-テアル文は、先行文の表す出来事を根拠にして推しはかれる推量判断を表現する機能をはたしている。

最近の日本語研究において、V-テアル文（「靴をはいてみる」）や V-テアルク文（「窓をあけておく」）については、連文構造の中でそれぞれの文のテキスト的な機能を解明しようという試みがなされているが、V-テアル文についてはまだ研究がなくこの論文が初めてだと思われる。必ずしも充分とはいえないところを残すが、三つの連文構造の提案は意欲的で魅力的である。

第四章「動詞と文と連文」では、第一章から第三章までの考察を整理しつつ、「要素と全体との相互作用」という理論的観点から、動詞と文、文と連文との相互作用についてあらためて論じられる。

動詞と文については、動詞（V-テアル）を述語とする文において、要素であるV-テアルの性質と全体である文の性質とが相互に特徴づけあうことが述べられる。客体変化他動詞のうち

二格名詞と結合する動詞からのV-テアル文は存在様態文となることが多く、そうでない動詞からのV-テアル文は結果様態文となることが多い（ただしこれらは経験所有文にもなりうる）。一方、相手変化他動詞と主体変化他動詞からのV-テアル文はほとんどすべてが経験所有文となる。こういった分布が具体的な用例数で示される。このような、動詞が文を規定する方向を示すとともに逆の方向すなわち、文の構文特徴がV-テアルの意味をかえることがあることも豊富な具体例で示される（「洗面所にタオルがたたんであった。」：二格名詞と結合しない客体変化動詞が、[[場所]に[物]がV-テアル]という構造の中で設置動詞的な意味になる、等）。

文と連文との相互作用についても、上の第三章の説明で述べたような、文が連文を特徴づけるという方向を確認するとともに、それとは逆の、連文構造が文の意味類型に影響を及ぼすことがあるとする（「甘い香りが漂ってきた。庭にたくさんのバラが植えてあるのだ。」：存在様態文が<説明・解説付加型>の連文構造の中で、事態説明の機能をはたす、等）。

V-テアルをめぐるこれまでの研究のなかで、動詞（V-テアル）と文と連文との関係を、要素と全体との相互作用という点からこれほど意識的に考察したものはなかったといってよい。部分的には論証が不十分なところもあるが、重要な視点であり V-テアル研究を新たな段階に進展させようとする取り組みである。

第五章「～テアル」形式の意味機能と関連する諸形式」では、V-テアル形式の意味機能と関連する形式である「V-テイル」と「V-テオク」を取り上げ、ここでも、語レベル、文レベル、連文レベルを意識しつつ、V-テアルとそれぞれとの異同が調べられる。

V-テアルと V-テイルの表現する事態が類似する場合がある（「窓があけてある／窓があいている」）ことは既に広く知られているが、それぞれの形式をとりうる動詞の種類、文の意味タイプ、用いられる連文構造などを総合的に検証すると、V-テアルの使用範囲はV-テイルのそれより狭いことが実証されるという。また、V-テアルと V-テオクとの異同も興味深い問題であり（「解決策はもう考えてあります。」「解決策はゆっくり考えておこよ。」）、種々の観点からの検討によると、V-テアル文は状態性を備えた広義の存在文、V-テオク文は動作性を備えた動詞文、という面が際だつという。

本論文はV-テアルについての考察を主眼とするものであり、V-テイル、V-テオクについては、V-テアルのような徹底した考究はなされていない。そのため、三つの形が同程度の分析のもとに比較されているわけではなく、この章の考察にはまだ深みがたりない。これら三形式の性質の全面的な解明は今後の課題とせざるを得ないのだが、従来の見解を実証的に検証し、さらにこれまで気づかれていなかった新たな知見をいくらか加え得たことは評価できる。

全体についての講評

論文の各章ごとの評価については、上の「論文の内容」でも述べたが、それらも含め、本論文に対する審査委員からの講評は次のようにまとめられる。

まず、評価すべき点として次のようなことがあげられる。

(1) 先行研究を理解したうえで、独創的で興味深い論考がなされている。

V-テアル研究は、研究の蓄積の多いテーマであるが、先行研究の論点を十分に理解したうえで、着実かつ独創的な方法論によって考察をすすめ、先行研究では気づかれていなかったV-テアルの性質をいくつも明らかにしている。とくに、V-テアルを連文レベルでとらえてこれほど深く追究した研究は、これまでにほとんどない。語レベル・文レベル・連文

レベルに分け相互の関係も考究したことで、V-テアル研究を大きく進めることになった。

(2) たいへん実証的であり、実例についての適切な分析が立論を支えている。

小説、評論など約 100 作品から得た約 2700 例の V-テアル形式について、いろいろな角度から丁寧に観察・分析されていて、種々な現象への目配りがきいている。分類の妥当性などについての論証に際して、質・量ともに適切な例文が選ばれ具体的な説明がなされていてわかりやすい。また、例文を複眼的に分析したことによって、細かい問題についても興味深い指摘が随所に行われている。ある委員から、「データに語らせる」というのがまさにあてはまる論文になっているという評価があった。

(3) 論の展開が着実である。

上の(2)とも関わるが、実例をおさえつつなされる論の展開が着実で飛躍がない。例文の解釈なども適切で、それにもとづく論証は説得的である。必要に応じて数値によって分布の特徴が示されたり、適切な図示によって連文構造がわかりやすく説明されていたりして、理解が助けられる。

(4) 文法化の現象について適切な考察がなされている。

独立の動詞「ある」が次第に補助動詞になっていくいわゆる文法化の現象が、副詞修飾のあり方を具体的に用例で示しつつ(「埃がちゃんと払ってある」「その言葉は注意深く避けてあった」)検証されていて説得的である。V-テアルをはじめとする様々な補助動詞(V-テイル、V-テオク、V-テミル、V-テイク、V-テクル、V-テマワ、V-テアゲル、等)の研究にとって、文法化は重要な問題であり、その面での貢献ともなっている。

(5) 関連形式との異同の研究への足がかりがなされている。

V-テアル形式の性質の闡明には、類似の性質をもつ V-テイル形式・V-テオク形式の研究を進めることが必須である。本論文は、方法論的にも理論的にも、それらへ踏み出しうる十分な切り出し口となっており、今後の研究方向の展望も示されていて進展が期待される。

次に、問題点としては以下のようなことがあげられる。

(1) 術語の定義がはっきりしないものがある。

論を進める上で重要な術語のうち、たとえば、「語彙的な意味」と「カテゴリーカルな意味」、「構文」と「文型」などの術語の定義が明瞭でなく、本論文中でゆれているように思われる箇所もある。「相手変化他動詞」「主体変化他動詞」のようにある領域で独特の用語には、詳しい説明が必要である。

(2) 資料の選定方針の説明がやや不十分である。

実証的な研究にとって、資料の適切さはきわめて重要であり、用例を収集する作品の選定の方針・基準などに意識的になる必要がある。そしてその際、言語の種々の面でのヴァリエーション(時代、社会的位相、テキストのタイプ、地の文か会話文か、表記のゆれ、など)について配慮することも必要だろう。

(3) 地の文と会話文との違いの考慮がなされるとよかったのではないか。

上の(2)の言語のヴァリエーションの問題と関わることだが、本論の論旨との関係でいえば、地の文か会話文かによって、V-テアル文のタイプ(存在様態文か説明付加文か)に分布の偏りがありそうであり、そういった観点からの考察も今後必要だろう。

(4) 先行研究の紹介がやや羅列的になっている感がある。

多くの先行研究が紹介されているが、本論文の立場からの先行研究の問題点の整理と、それを克服すべくとられた本論文の方法論および成果とが、より明瞭に述べられているとよかった。

(5) 例文の解釈がやや不適切なものがある。

大多数の用例は適切に解釈され、立論を助けているが、いくつかの例文について、その判断にやや疑問が残るものもある。

なお、本論文の大きな特徴として、テーマを限定し考察範囲や方法論を抑制したことがあげられる。このような方針をとったことにより、本論文は、きわめて完成度の高い論文となったといえる。ただしそれはまた、手堅くまとめすぎたという感も抱かせる。今後は、FSP(functional sentence perspective)の観点からの分析、ヴォイス的な性質との関係などにも考察の幅を広げることによって、新たな展開がみいだせるのではないかと思われる。審査委員会からの期待をこめた要望として、李氏に今後とり組んでほしい課題である。

結論

以上述べたように、李京保氏の研究は、現代日本語の V-テール形式にかかわる問題を包括的にかつ深く考究したものである。批判されるべき点がないわけではないが、日本語のアスペクト研究に着実な成果を付け加え、研究の進展に大きく貢献する論文であることは間違いない。最終試験においては、李氏が本論文の意義および問題点をしっかり自覚しており、問題点についてはそれを再考し発展させるための方向性をつかみつつあることが窺えた。適確な質疑応答からも、李氏が十分にその力を備えており本論文をもとにさらなる飛躍が期待できるものと判断された。

学位請求論文の内容、最終試験における応答などから総合的に判断した結果、審査委員会は、全員一致でこの研究が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであるという結論に達した。